

## 第七場面 八組のまとめ

「僕」は、エーミールにすべてのことを話したが、謝りはしなかった。「僕」がエーミールに「僕のおもちゃをみんなやる」と言ったら、彼は、「僕」を軽蔑的に見つめた。そして、「僕」はその場にいることが嫌になってきて、「僕」は一度起きたことはもう償いのできないものと悟っていた。「僕」は家に帰り、寝ようとする前に、食堂へ行つて、ちようを一つ一つ指で粉々に押しつぶした。「僕」が、ちようを一つ一つ指で粉々に押しつぶした。「僕」が、ちようを一つ一つ指で粉々に押しつぶした。「僕」の心を縛っていたものが一つ一つ取れていった。

堀 瑞季

「僕」は、エーミールにすべてを話した。ちようを粉々にしてしまったことを聞いても、エーミールは怒らなかった。「僕」はこんなことをしてしまったことを後悔した。ちようをつぶしたことでエーミールから軽蔑されたからだ。謝らずその場から立ち去り、母の所に行った。母は何も聞かず優しくしてくれた。しかし、まだ自分自身がすつきりしたわけではなく、収集したちようを一つ一つつぶすことで、罪を償おうとした。

渡邊桃香

「僕」は謝りもせず取引に出て、最初にエーミールにおもちゃをみんなやると言って許してもらおうと試みたが、彼が軽蔑的に見つめていたので、エーミールにちようはあげたくなかったけど、仕方がなくちようの収集を全部やると言った。だが、結構だよと言われて、のど笛に飛びかかるところまで怒りが増していた。そして、一つ一つちようをつぶすことで自分を罰して、もう二度とちよう集めをしない、ちよう集めとの決別をしたという意味が表れている。

田中裕瑛

エーミールは、すべてを話した「僕」の出方を待つてから悲しい一言を放った。しかし、「僕」は謝らず、取引に入った。すると今度は、「僕」のちよう集めのプライド・愛を一気に汚す言葉があいつから返ってきた。けれども、どうしようもなかった。家に帰ってから母が「僕」に起こった数分間の悲しい出来事を思い出させようとしなくてよかった。寝る前に、収集そのものに愛がなくなってしまった「僕」は、ちようを一つ一つ取りだし、つぶしていき、思い出をかみしめながら、「ちよう集めはもうしない」と思うのであった。

高橋みなみ

「僕」は、エーミールの持つ「正義」という盾の堅さに負け、心をめちやめちやに打ちのめされて、エーミールの家から立ち去った。軽蔑されまくって立ち直れなくなっていた「僕」だが、母に優しくされ、少し元気になった。遅い時刻だったが、不思議と眠くはなかった。おそらく、床に入っても眠れなかっただろう。「僕」は自分にはちようを集める資格がないと悟ったから、一つ一つちようをつぶすことで、二度とちようを集めない心に決めた。

久保田真也

「僕」は恐れながらもエーミールにすべてを説明した。しかし、エーミールは許してくれなかった。だから、「僕」はおもちゃやちようをやると言ったけど、エーミールはそんなものに見向きもしなかった。そして「僕」は、エーミールが言ったことに腹を立てながら家へ帰った。もう僕にはちよう集めをする資格なんかないと思ひ、一つ一つ指で粉々につぶすことで、このちように関する思い出を二度と思ひ出さぬようにしようと思った。

青谷有梨

「僕」がクジャクヤママユは自分がつぶしたことをエーミールに告白すると、エーミールは、低く、「ちえつ」と舌を鳴らし、「つまりキミはそんなやつなんだな」と言った。「僕」は、許してほしくて、「僕のおもちゃをみんなやる、自分のちようの収集を全部やる」と言ったが、彼は軽蔑的に「僕」を見つめていた。その時、「僕」はクジャクヤママユをつぶしたことをとても後悔し、家に帰ると、別れの気持ちを込めて、自分のちようを指で粉々に押しつぶした。

地崎滉平

出来事をすべて彼に話したが、彼は冷淡に構え、「僕」をただ軽蔑的に見つめていた。「僕」は収集したちようを全部やる、と言ったが、「僕」のことはすでに知られていた。「僕」が悪かったのに、「あいつ」ののど笛に飛びかかるところだった。しかし、正義を盾に、侮るように「僕」の前に立っていた彼には、もうどうにもしようがなかった。「僕」の罪悪感は晴れずに家に帰ってきてしまった。「僕」は大きなどび色の厚紙の箱を寝台の上に載せ、暗闇の中で開いた。「僕」の大きな宝物のちようを一つ一つ取りだし、その一つ一つの思い出とちようと一緒に、粉々に押しつぶしてしまった。

松波寛人

「僕」は、エーミールがいつそ怒鳴りつけてくれれば気が楽になるのと思ったが、エーミールはそうせず、「僕」を軽蔑的にみている。どんな物をやるといっても、彼の態度は変わらなかった。「僕」は家に帰ると、母がかまわず何も聞かずに「床にお入り」といつてくれたのをうれしく思った。寝る前に食堂に行つて、ちようを持って行き、寝台の前で一つ一つ指で粉々に押しつぶした。それは、「僕」の今までの自分を否定する行いだつた。

国枝まり